○資料調査報告

インド「仏教聖地」における寺院管理の地域的意味

寺院管理をめぐる宗教間の緊張を事例に

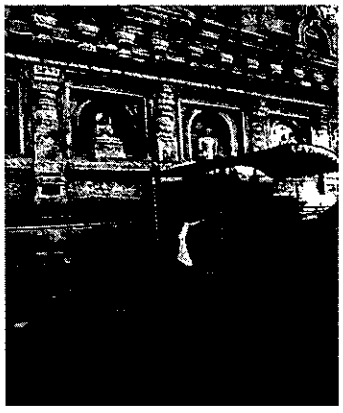
The Local Construction of"Sacred Place of Buddhism":
The Case study of disputes between Buddhists and Hindus over the temple management

前島　訓子

1　はじめに

インド北部のビハール州ガヤ県南部に位置するブッダガヤは，仏教創始者であるブッダの悟りの地として知られ，仏教最大の「聖地」と称されている．この地には，ブッダが悟りを開いたことを記念し7世紀ごろに建立され，約50mの高さを有す大塔（Mahabodhi Temple）や英領期に大塔周囲の発掘が進む中で発見された金剛宝座（Vajarasana）がある．2002年にはUNESCOの世界遺産に登録され，これらの歴史的建造物は国内外の仏教徒からの篤いまなざしが向けられている．ヒンドゥー教が先祖に供物を捧げる宗教儀礼を行う地の一つであるこの場所には，ヒンドゥー教徒も数多く訪れる．そして，グローバル化が広く浸透するに伴い，数多くの観光客が訪れる観光スポットにもなっている．

ブッダガヤの歴史的建造物は，1949 年に The Bodh Gaya Temple Act（ブッダガヤ寺院法：以下，寺院法と略す）が策定され，同法に基づき組織された BTMC（The Bodh Gaya Temple Management Committee：ブッダガ寺院管理委員会，以下 BTMC と略す）によって管理されている．BTMC はヒンドゥー教と仏教の両宗教によって構成され，管理を遂行するという，独特の寺院管理体制をとっている．



↑　金剛宝座（2009.02.24 撮影）

↑大塔正面（2009.02.24 撮影）

このような体制が整えられる背景には，1892 年以来，大塔をめぐるヒンドゥー教と仏教

との間に緊張の火種がくすぶっていたことにあった．当時，大塔はヒンドゥー教シヴァ派の僧院（Math）の院長であるマハント（Mahant）によって所有されていた．マハントはかつて数多くの修行僧を弟子に持ち，ブッダガヤ一帯の土地を所有する大地主でもあった．

ヒンドゥー教と仏教の対立になぞられる1892年の緊張は，このマハントと，マハントの手にあった大塔を仏教徒の手に返還するよう求めたスリランカの仏教徒（アナガリカ・ダルマパーラ）との間に生じた．この問題は，アナガリカ・ダルマパーラの切なる願いもあり，1922年にはインド独立後に政権を握る国民会議派の議題に取り上げられ，ブッダガヤの寺院問題を調査する委員会が組織されることとなった．独立以降に成立を見た特殊な寺院管理体制は，この委員会の調査結果に基づき具体化されたものであった．

ところが，以下で述べるように，1992年にその体制をめぐって再び仏教徒とヒンドゥー教徒の間に緊張が走ることとなった．この緊張は，マハーラーシュトラ州のナーグプル出身の新仏教徒達[1]が大塔返還を求めて運動を展開し，BJP（Bharatiya Janata Party:インド人民党）をはじめとするヒンドゥーナショナリスト等を刺激したことによって顕在化した．しかし注意しなければならないのは，新仏教徒達の運動に抗議しているヒンドゥー教徒（ヒンドゥーナショナリスト等）が，この地に生活する大半のヒンドゥー教徒の声を代表するものではないということである．

ここでは特に，緊張の争点の一つである寺院管理のメンバーシップの問題を取り上げたい．そして，寺院管理や寺院をめぐる紛争を当時者の問題として地域の文脈から切り取るのではなく，地域の文脈から問題を捉えなおすことによって，現地の人々の「寺院管理像」の一端に迫りたい．本稿では，寺院管理をめぐる緊張の争点に関する現地での聞き取り調査およびその結果について報告する．

2　先行研究および調査概要

2.1　先行研究

ブッダガヤに関する記述は，この地を訪れた巡礼者や観光客が書いたものも含めれば，数知れない．その大半が，直接的，間接的にせよ，英領期に記録された文献に依拠しているといっても過言ではない．ブッダガヤに関して言えば，1861年から1865年にかけてインド考古学調査機関（Archaeological Survey of India）がこの地域の調査および発掘の記録を残している(Cunningham 1892)．600年代にこの地に訪れその記録を残した中国僧（玄奘）の書物に基づきながら行われた彼らの調査結果は，インドにおける仏教の歴史に加え，当時のブッダガヤを知る手掛かりを提供している．

また，大塔をめぐる1892年以降の寺院をめぐる緊張を取り上げる代表的な研究としては次の研究があげられる．人類学を専門とするTrevithick（1988）は，主としてアナガリカ・ダルマパーラの書簡や裁判記録等をたどり，その緊張を取り上げている．宗教学を専門とするKinnard（1998）や歴史学を専門とするCopland(2004)は，Trevithickとは異なる角度からこの問題を取り上げている．Kinnardは，アナガリカ・ダルマパーラの大塔返還を求める運動に大きな影響力をもったオリエンタリストに注目しているのに対し，Coplandは，この問題をめぐる当時の英領政府とマハントとの関係に力点を置いている．

しかし，いずれの研究も寺院法成立に至るまでの議論が中心であり，寺院法成立以後の議論は手薄であると言わなければならない．もちろん，独立以降のブッダガヤに関して論じた研究が皆無かといえばそうではない．寺院管理に関しては，仏教学を専門とする佐藤(1988)が取り上げており，独立後に大塔がマハントから州政府の所有へと移り，寺院管理体制が整うまでのプロセスについて言及している．また，経済学を専門とする Naresh(2000) は，独立以降にブッダガヤ社会に生じた変化を概括しており，調査を進める上でも大いに参考になる．とはいえ，総じて独立以降の寺院管理の実態やその内実，寺院管理をめぐる紛争について，十分な実証的研究が行われてきたとは言い難い．

また，1991 年の Census によると，ブッダガヤの宗教人口構成は，ヒンドゥー教徒は 91%，イスラム教徒は 8%となっており，仏教徒はわずか 0.08%に過ぎない．にもかかわらず，現地の人々の視点に立った研究は管見の限り皆無に等しい．なによりも，寺院管理についても，寺院をめぐる紛争についても，それらを舞台にしているのはブッダガヤ社会であって，その社会を構成する現地の人々を無視することはできない．

その上，現地の人々の大半が，寺院をめぐる新仏教徒の運動に抗議するヒンドゥー教の立場として賛同し，抗議に加担しているわけではない．もし，そこに現地の人々ならではの視点，立場があるのだとするならば，寺院をめぐるヒンドゥー教と仏教の緊張という単純な二項対立に問題を還元することは，寺院管理をめぐる地域的意味を見落とすことになる．ようするに，寺院管理をめぐり現地の人々ならではの視点があるとするならば，これまでの研究はその点に十分に注意を払ってきたとは言えない．

したがって，調査としては，寺院法に基づいた特殊な寺院管理の実態に加え，それを問題視する仏教徒とヒンドゥー教徒の間に生じた緊張の争点を，現地の人々のどういった人々がどのように捉えているのか，いかなる立場の違いを表明しているのかといった点に求められよう．

2.2 調査概要

以上のことを踏まえ，調査は主として 2005 年の 8 月から 9 月末にかけて行っている[2]．農村地域に過ぎなかったブッダガヤは，マハント支配の影響力の低下や国内外の観光客・巡礼者，周辺地域からの移住者の増加に伴い急速に発展し，著しい人口増を経験しいている．このエリアは現在，新興都市区域となっており，本調査はこの都市エリアを対象地域としている．聞き取りを重ねる中で浮かび上がるのは，第一に，マハント支配下にあった頃，このエリアの集落（特に大塔周囲に位置する Taridhi, Thikabigha, Urael, Mastipur, Miyabigha 集落）は，独立後，人権保証等の観点から国家に特別の優遇措置が義務づけられる「指定カースト（Scheduled Castes : SCs)」や「その他後進諸階級（Other Backward Classes : OBCs)」に属する人々によってほぼ構成され，土地所有者は皆無に等しい状況にあったという点である．第二に，彼らの大半がマハントの土地か僧院において与えられた役割の就労に従事していたという点であった（前島 2007 参照）．しかし，独立以降，マハントの力を支えた地主制度の廃止等に伴い，その力も徐々に弱体化し，人々も各々の土地を所有し，観光業で財をなした者の中には土地を購入する者や，中には仏教徒に改宗する集落（Miyabigha 集落）もあらわれた．ここではブッダガヤにおいて仏教徒に改宗した

人々を仏教改宗者とし，新仏教徒とは区別している．

そこで，調査対象者は，新仏教徒達の運動に抵抗したBJPのグループのリーダーに加え，上述の集落に現在居住する，あるいはかつて居住していたヒンドゥー教徒・イスラム教徒，さらにMiyabigha集落において最初に改宗した人物にインタビューを行った．これまでに47名に聞き取りを行い，特に，現地のヒンドゥー教徒やイスラム教徒へのインタビューは，マハント支配下にあった頃の記憶を直接的・間接的に共有している人々や，本人あるいは父，祖父がマハントの下で就労に従事していた人々を軸に，スノーボールサンプリング法に基づき行っている．なお，インタビューはヒンディー語から日本語の通訳を介している．

3　調査結果

3.1　寺院管理の実態の一端

後述する新仏教徒等が，寺院法に基づいた寺院管理体制を批判の槍玉に挙げる理由の一つは，マハントが寺院を所有していた時代の管理体制を完全に払拭したものではないということである．では，従来の寺院管理体制の何が受け継がれ，何が受け継がれていないのか．典型的な例はマハント自体が寺院管理体制の中に組み込まれ，永久メンバーとしての役割を担っている点に表れている．

調査を行う中で，マハントの下で大塔にヒンドゥー教の儀礼であるプージャー[3]を行っていたヒンドゥー教の僧侶が，BTMC成立後，大塔にプージャーを行うBTMC専属のヒンドゥー教の僧侶として継承されているという管理実態を捉えることができた．佐藤（1988）はBTMCに仏教徒の常駐僧が置かれていることを指摘している[4]が，ヒンドゥー教の常駐僧については論じていなかった．筆者が調査行った2005年当時，ヒンドゥー教の常駐僧を確認した．そして，元BTMCのヒンドゥー教の常駐僧として勤めたR氏（当時65歳）に話を聞くことができた．R氏[5]はマハントの下で祖父，父，伯父と同じくプジャリをしていた．伯父が大塔専属のプジャリとして，大塔内部の奥の部屋に設置されているブッダ像と，同じ部屋の中央にあるシヴァリンガ[6]に，毎日朝夕にプージャーを行っていた．BTMCが成立すると，伯父はBTMCの常駐のヒンドゥー教の僧侶となった．R氏は，その後を継ぎBTMCの常駐の僧侶となり，大塔へのプージャーを続けると同時に，ヒンドゥー教の政治家等の有力者が参詣に訪れた際にプージャーを司る役割を担っていた．そして今現在は引退し，息子がその後を引き継いでいる．R氏によると，BTMC成立以前，大塔に加え，それに隣接するヒンドゥー教徒の寺院（Panch Pandav）にもプージャーを行う専属の僧侶がおかれていた．そのプジャリはマハントによって決められ，彼らによって毎日のプージャーが行われていた．BTMCが成立すると，大塔の僧侶はBTMCの常駐僧となるが，その他の僧侶はBTMCの常駐僧にはなっていない．とはいえ，今でもなおマハントの弟子である修行僧によってプージャーが続けられているということであった．

ようするに，寺院管理体制が整い約50年の時を経ながらも，マハント支配下にあった頃からの儀式が細々と寺院管理体制の内部において維持されていることが分かる．

3.2　歴史的遺跡をめぐり顕在化する不協和音

ヒンドゥー教と仏教の両宗教によって構成され，先にみた従来の寺院管理の要素を取り込んでいる寺院管理体制やそれを定めた法律は，1992年に生じた仏教徒とヒンドゥー教徒の対立の引き金となった．その対立の中心にいるのが，仏教僧である秀嶺佐々井[7]率いる新仏教徒とヒンドゥーナショナリストと知られるVHP(世界ヒンドゥー教会)やRSS(民族奉仕団体)，BJPといったヒンドゥー教徒達であった．

事件の発端は，新仏教徒達による「大菩提寺解放闘争[8]」の展開にある．「ブッダガヤ奪還闘争[9]」とも称される彼らの運動は，仏教への改宗や，抗議集会，デモ行進，座り込み，断食等を通して大塔の返還を訴えるものであった．彼らの主張は，両宗教による寺院管理を問題視し，「大菩提寺」（＝大塔）が歴史的事実において正当な継承者である仏教徒に委ねられるべきであるとする[10]．そして管理体制を支える寺院法を「非人権，非宗教，非憲法的，非仏教的法規」として非難し，同法を放棄し，新たな法を作り直すことで「新しいブッダガヤ建設」，「新しい大菩提寺建設」をすべきだと主張する．

それに対し，ヒンドゥー教徒の主たる主張[11]は，第一にブッダはヒンドゥー教のヴィシュヌ神の9番目の化身である．それゆえ，大塔は仏教徒だけでなくヒンドゥー教徒にとっても重要な信仰対象であるからして，ヒンドゥー教徒に寺院管理の権限があるのは当然であるとし，第二に，大塔の内部にシヴァリンガや，大塔に隣接するヒンドゥー教の寺院（Panch Pandav）があることから，もはや寺院が完全な仏教寺院ではないとする点である．ヒンドゥーナショナリスト等が新仏教徒達の運動に対して過敏に反応したのは，仏教徒達の抗議そのものに加え，その抗議が当時ビハール州の政権を握っていたJD(Janata Dal Party：人民党）の戦略と結びつき，州政府が「1949年の法律を棄却し，仏教徒に完全な管理権を与える[12]」との旨を公表したことにあった．さらに，ガヤ県のDM（Gaya District Magistrate:ガヤ県長官）が，BTMCの寺院管理地内の敷地において行われている，すべてのヒンドゥー教の儀式を禁止したことも問題を深刻化させた．

調査当時，都市エリアのBJPをまとめるリーダーのA氏[13]と農村エリアのBJPをまとめるリーダーのK氏[14]によると，両者ともブッダがヴィシュヌの9番目の神であると述べ，新仏教徒達の主張を非難した．K氏はBuddha Purnima（ブッダ生誕）の日に，生誕を祝うために乳粥をふるまうという看板を出したところ，新仏教徒達によって看板が壊され，彼らにふるまった乳粥も捨てられたと話す[15]．ヴィシュヌとブッダは一緒なのだから，こういった仏教徒の行為はブッダへの攻撃に通ずるものだという．こういった主張は，新仏教徒達およびそれを擁護する側からすれば「仏教徒の聖地を破壊」するための「誤った主張」にほかならない[16]．

興味深いのは，彼らが抱いている仏教徒に対する懸念が，ブッダとヴィシュヌ神とは別ものであるという立場に立ち，大塔を仏教徒の手に戻されなければならないとする新仏教徒達の主張や抗議運動だけに向けられているわけではないということである．K氏は，遡ればヒンドゥー教，仏教といった感覚はなく，ただそこに大塔があり，両宗教の区別はなかったと述べ，大塔の面倒を見てきたのはマハントでありヒンドゥー教徒である今の自分達の祖先だとする．A氏も類似の主張をしている．このようなK氏の主張はヒンドゥー教が古からこの地に基盤を築いてきたことを正当化する主張として片づけることはできない．K氏はナーグプルやアグラといったブッダガヤの外部からやってきた仏教徒が大塔の返還

を求めることを問題視する．A氏も，違う州からやってきた仏教徒による抗議に不快感を抱いている．外からやってきた仏教徒達は抗議をする時だけ訪れ，大塔の返還を求めて帰っていく．普段からブッダガヤにいるのは自分達であり，寺院に何かもしものことがあった時にそばにいるのは自分達なのだと話す．ようするに，彼らが仏教徒による管理を拒む根拠には，宗教的意味だけでなく，ブッダガヤに住んでいる人間である「われわれ」の大塔といった意味合いが含まれているといえよう．

そして，新仏教徒達の運動は，BJPだけでなく，ブッダガヤの人々の間でも好意的に捉えられているとはいえない．ヒンドゥー教徒の中でも，旅行代理店の仕事を営むS氏[17]は，仏教徒のみによる管理をよしとしながらも，ナーグプルの新仏教徒が管理することには難色を示している．また，かつてマハントの下で働き，現在は建設現場で働いているN氏[18]は仏教徒が信仰の対象とするブッダ像もヒンドゥー教徒が信仰の対象とするシヴァリンガも共に石でできており，いずれも大塔内部の一室にあって，それらが争うことはないと述べ，一連のヒンドゥー教と仏教の寺院をめぐる対立は無意味であるとする．

3.3 BTMCのメンバーシップにみる地域の寺院管理像

紛争の争点の一つでもある寺院管理のメンバーシップに焦点を当て，ブッダガヤに生活するヒンドゥー教徒やイスラム教徒，仏教改宗者へのインタビューから次のことが分かる．メンバーシップに関する意見の相違からすると，大きく仏教徒のみによる寺院管理が望ましいとする人々と，両宗教による寺院管理が望ましいとする人々の二つに分かれた．前者の見方はイスラム教徒や仏教改宗者の間に，後者はヒンドゥー教徒の間に確認できた．

①仏教徒による寺院管理－仏教改宗者・イスラム教徒

・仏教改宗者

仏教改宗者は仏教徒による管理を望ましいと答えた．ただし，BTMCの現状をどのように捉えているかについては若干の違いを確認できる．例えば，ブッダガヤ出身でヒンドゥー教徒から仏教僧に改宗したH氏[19]や新仏教徒達の運動を肯定的に捉えるO氏[20]は，両宗教による寺院管理がなされている現状に不満を述べた．他方，ヒンドゥー教から仏教に改宗したL氏[21]は，BTMCのメンバーが仏教徒になることに異論はないとしながらも，すべて仏教徒になった場合，今度は仏教徒の間で管理をめぐる問題が起きるであろうと懸念する．L氏の主張は，管理をすべて仏教徒に任せることで，問題が丸く収まるわけではないという，管理の仏教一元化に消極的な考えが読み取れる．

・イスラム教徒

また，イスラム教徒も仏教徒による管理を望ましいと答えた．土産物屋を営み，ハンディ・クラフト・センターのvice chairmanの肩書をもつイスラム教徒のMd I氏[22]や，ホテル経営に向けて動き出している同じくイスラム教徒のMd U氏[23]は，ともに自らの宗教や他の宗教（キリスト教）に照らし合わせ，イスラム教はモスクを管理し，キリスト教は教会を管理していることを考えれば，仏教の寺院である大塔は仏教徒が管理した方がよいと述べる．また，イスラム教徒の中には，数珠等の土産物屋を営むグループであるマラフォト[24]のリーダーであるMd J氏[25]のように，どちらかといえば仏教徒による管理を望ましいとしながらも，「ブッダガヤ寺院法」の存在からして，そもそもいずれかの宗教が

寺院管理を行うことは困難だという見方もある．

②両宗教による寺院管理－ヒンドゥー教徒

両宗教による寺院管理を望ましいとする見方はヒンドゥー教徒に確認できた．とはいえ，ここでも主張の根拠に違いがある．マハントの専属の運転手をしていたG氏[26]はブッダがヒンドゥー教の化身であることから両宗教による寺院管理のあり方を肯定する．また，文具店を営むC氏[27]も，自分達ヒンドゥー教徒はブッダをヴィシュヌの生まれ変わりとして考えていると述べ，両宗教が一緒に寺院管理をすることが大切だとしている．G氏やC氏の主張は先に見たBJPの主張と重なる．ただし，すべてのヒンドゥー教徒がBJPの主張と重なるわけではない．BTMCのスタッフとして働くE氏[28]は「ブッダガヤ寺院法」を理由に挙げる．BTMCが管轄する寺院管理地にヒンドゥー教の寺院（Panch Pandav）があり，仏教徒のみの管理になった場合，それらが壊される可能性があり，現法に基づいた両宗教による管理が望ましいと述べる．

さらに，先にも取り上げたように，宗教的対立を無意味だと考えるN氏は，寺院管理は仏教か，ヒンドゥー教かという問題ではないとし，寺院にとって望ましい管理であるか否かという観点にたって考える必要があると話す．いずれかの宗教が管理したところで，寺院にとって望ましい管理がなされるとは限らない，むしろ管理されないだろうとする．現在の寺院管理が寺院を適切に管理しているのであれば，今の管理のあり方が適していると述べる．そして，マハントの下で詩を読んでいたという75歳のF氏[29]は，外の人間は現地のことが分からないが，地元の人間がBTMCのメンバーであれば，地元のことがよくわかるとし，また両宗教のメンバーがいずれも地元の人間であれば一緒にうまくやっていけると述べている．地元の人間をメンバーに求める声は，F氏だけでなく，BJPのK氏やA氏，仏教徒による管理を肯定するヒンドゥー教徒のS氏や，イスラム教徒のMd U氏やMd J氏，仏教改宗者であるL氏からもうかがえた．ただし，BTMCの仏教メンバーとして長らく務め，名古屋に本山をおき，この地域に寺院を建立している大乗教の駐在員であったMangal Suba氏[30]のように，仏教徒の中にも，ヒンドゥー教徒が大塔の面倒を見てきた点を認め，BTMCメンバーからヒンドゥー教徒を除くことに賛同しないとする意見があることにも注意を払いたい．

以上からわかるように，宗教的立場の違いによってBTMCのメンバーシップのあり方についての意見の相違が見てとれる．注目すべきことは，立場の差異を超えて通底する論点が浮かび上がる点である．第一に，寺院管理の争点は，何が寺院にとって望ましいのかという声であり，第二に，寺院管理において複数の宗教の関わりを認めるとしても，望ましい管理とは一つの宗教に独占させることではないとの声やいずれかの宗教に一元化することで緊張がもたらされるとする声である．そして第三に，メンバーシップの要件に，メンバーの宗教的アイデンティティが何かである以上に，そのメンバーがブッダガヤ社会に対する理解を持っているかどうかという点である．

4　おわりに

ブッダガヤにおける寺院管理は，従来のあり方を無きものとし，全く新しい組織として登場したのではない．むしろ，従来の仕組みを組み込む形で登場した．それは，両宗教が

BTMCのメンバーであることに見出されるだけではなく，既にみたように，ヒンドゥー教の常駐僧の人選が依然として大塔がマハント管轄下にあった頃以来のあり方に従って行われていることからも分かる．このことは，寺院管理のあり方は仏教とヒンドゥー教の両宗教を尊重するものであり，どちらかの宗教への一元化を目指すものではないということである．しかし，そのような寺院管理のあり方に抗議した新仏教徒達による大塔の返還を求める抗議運動は，いわば仏教徒による一元的な管理を求める運動である．逆に，新仏教徒達の運動に抗議したBJPの行動は仏教徒達による管理の仏教一元化に抵抗するものといえる．その際，インタビューからもうかがえたように，ヒンドゥーナショナリスト等は一様にしてブッダがヴィシュヌ神の化身であるとする宗教的理由を掲げ，新仏教徒達に対抗してきた．

しかし，本調査において明らかになってきたのは，ヒンドゥー教徒の新仏教徒等の主張に抗議する理由は宗教的な理由にとどまらないということである．ブッダガヤの人々へのインタビューからもわかるように，両宗教の寺院管理が望ましいとすることへの理由付けは一つではない．ブッダがヴィシュヌの化身であるから，両宗教が望ましいという主張も一つの理由にすぎない．

また，ブッダガヤの人々は，仏教徒であれ両宗教であれBTMCの担い手に地元の人間つまりは，自分達の利害を代弁する人々を含んだ寺院管理のあり方を求めていた．寺院管理の担い手が，地元出身者ではない，いわゆる「よそ者」であれば，現地に先祖代々住む自分たちと寺院との歴史的な関わり方に対する配慮を欠くものだからである．したがって，この地に先祖代々住む自分達と寺院との歴史的な関係に配慮できるメンバーによる寺院管理に，ブッダガヤの人々の求める理想的な「寺院管理像」の一端が表われているといえよう．

しかしながら，寺院管理をめぐる議論は，まだまだ道半ばであり，更なる調査，検討を必要としている．2002年の大塔寺院群の世界遺産登録に伴い，寺院とその周囲環境（社会）との調和がますます必要とされる中，「寺院管理地」内の開発等を担うBTMCとそれ以外の開発等を担う自治組織との協力がこれまで以上に求められるようになってきている．「寺院管理像」には，寺院とその周囲環境（社会）との調和を図るべく，BTMCと自治組織，さらにはブッダガヤの人々との関係を構築するための手がかりが秘められていると思われる．言い方を変えればそれは「仏教聖地」とされるブッダガヤをどう築いていくか，という問いを紐解く手がかりともいえよう．それはおそらく，ブッダガヤに住む人々が寺院管理に関わるためのルート，つまりBTMCに対する不安を汲み上げ，それを寺院管理のあり方ひいては「聖地」のあり方を見直す資源とするようなシステムの構築を示唆しているであろう．

［注］

1）「新仏教徒」とはもともとインド憲法起草委員会の委員長であるアンベードカルの呼びかけによって不可触民から集団で仏教に改宗した人々のことで，旧来の仏教と区別した呼び方である．

2）本調査以前に，2003年，2004年に2回のフィールドワークを行っている．

3）佐藤（1988）によれば，1953年4月26日に開催されたBTMCの第1回公式会合において，BTMCは「常駐の仏教僧を置いて，勤行・法要を行わしめる」と決議している（佐藤1988：126）．2005年当時，仏教徒の常駐僧は8人（アッサム州，ビハール州の仏教僧各4名）であった．佐藤はヒンドゥー教の僧侶について

触れてはいない.

4)「プージャー」とは，供物を神像に直接ささげ礼拝する儀礼を中核とする，ヒンドゥー教の神像礼拝の儀礼のことをいう（辛島他 2005：625).

5) R 氏，65 歳，男性，Bakarora 集落居住，高カースト[2005.08.06]

6)「リンガ」とは男性の性器をかたどったとされる彫像で，ヒンドゥー教の主神の一つであるシヴァ神，あるいはそのエネルギーの象徴として崇拝されている（辛島他 2005 参照).

7) 現在，新仏教徒達を率いて，大塔返還を求め抗議しているのが秀嶺佐々井氏である.

8) この闘争は 1992 年 9 月 27 日に初めて行われ，大塔の解放を求め 6,000km の行進を行った大規模なものであった．そして 2002 年までに 12 回の抗議活動が行われている．(『バンテジー，ジュネーブ，パリへ行く』http://kobe.cool.ne.jp/nagaland/gotounesco.htm（2006.01.07 確認))

9) http://www.tomigaya.shibuya.tokyo.jp/sasai-g/buddhagaya.html（2006.01.08 確認)

10) 大塔返還を求める動きは一つではない．地元出身で仏教に改宗した R.B.Prasad は，大塔返還を，新仏教徒達のような抗議行動という方法ではなく，対話という方法で求めた.

11) "The Illustrated weekly of India", June27-July3, 1992 に基づく.

12) 同上

13) A 氏，33 歳，男性，Pachatty 集落居住，高カースト[2005.08.13]

14) K 氏，45 歳，男性，Bakarora 集落居住，高カースト[2005.09.07]

15) A 氏によれば，毎年ブッダ生誕の日になると BJP はブッダとシヴァリンガに乳粥を捧げプージャーを行った後，ブッダガヤの人々にも乳粥をふるまっている.

16)「聖地の管理を仏教徒に移管するよう世界にアッピールしよう」http://kobe.cool.ne.jp/nagaland/daitomondai.htm　(2007.07.17 確認)

17) S 氏，34 歳，男性，Tikabigha 集落居住，OBC[2005.08.22]

18) N 氏，58 歳，男性，旧 Taridhi 集落居住，OBC[2005.08.31]

19) H 氏，？歳，男性，仏教徒[2005.08.30]

20) O 氏，56 歳，男性，Bazar 集落居住，仏教徒[2005.08.28]

21) L 氏，52 歳，男性，Miyabigha 集落居住，SC[2005.08.28]．様々な仏教寺院で働いた経験がある.

22) Md I 氏，45 歳，男性，Pachatty 集落居住，イスラム教徒[2005.08.23]

23) Md U 氏，39 歳，男性，Pachatty 集落居住，イスラム教徒[2005.09.02]

24)「マラフォト」とは，マラ（数珠）とフォトグラフの造語である．地元の人々が数珠や写真を撮ることを商売とする中で，その集団を指して使われるようになった言葉である.

25) Md J 氏，33 歳，男性，旧 Taridhi 集落居住，イスラム教徒[2005.08.23]

26) G 氏，70 歳，男性，Bazar 集落居住[2005.08.30]

27) C 氏，70 歳，男性，旧 Taridhi 集落居住，OBC[2005.09.02]

28) E 氏，40 歳，男性，Rattibigha 集落居住[2005.09.01]

29) F 氏，75 歳，男性，Navtapur 集落居住，高カースト[2005.08.02]

30) "The Illustrated weekly of India" , June27-July3, 1992

[文献]

Copland Ian, 2004, "Managing Religion in Colonial India The British Raj and the Bodh Gaya Temple Dispute"*Journal of Church & State*,46, 3,527-559.

Cunningham Alexander,1892, *Mahabodhi or The great Buddhist temple under the Bodhi tree at Budda-Gaya*, Varanasi: Indological Book House. Replinted in：Allen W.H.ed,1961, *Mahabodhi or The great Buddhist temple under the Bodhi tree at Budda-Gaya*, Varanasi: Indological Book House.

辛島昇・前田専学・江島惠教・応地利明・小西正捷・坂田貞二・重松伸司・清水学・成沢光・山崎元一監修, 2005,『南アジアを知る辞典』平凡社

Kinnard Jacob,N., 1998, "When Is The Buddha Not the Buddha? The Hindu/Buddhist Battle over Bodhgaya and Its Buddha Image", *Journal of the American Academy of Religion*, 68, 4, 817-839.

前島訓子, 2007,「『仏教聖地』における伝統支配の衰退と社会的変容—独立以降のインド村落社会研究を手がかりに」『名古屋大学社会学論集』第 28 号, 83－104.

Naresh Banerjee,2000,"*Gaya and Bodhgaya A profile*",Inter India Publication
佐藤良純，1988，「ブッダガヤ寺院法をめぐって」『パーリ学仏教文化学』Vol.1，121-133.
Trevithick Alan Michael，1988，*A Jerusalem of the Buddhists in Biritish India : 1874-1949*，Harvard University Ph.D. Dissertation, Harvard University

（前島訓子：名古屋大学大学院環境学研究科博士後期課程）